

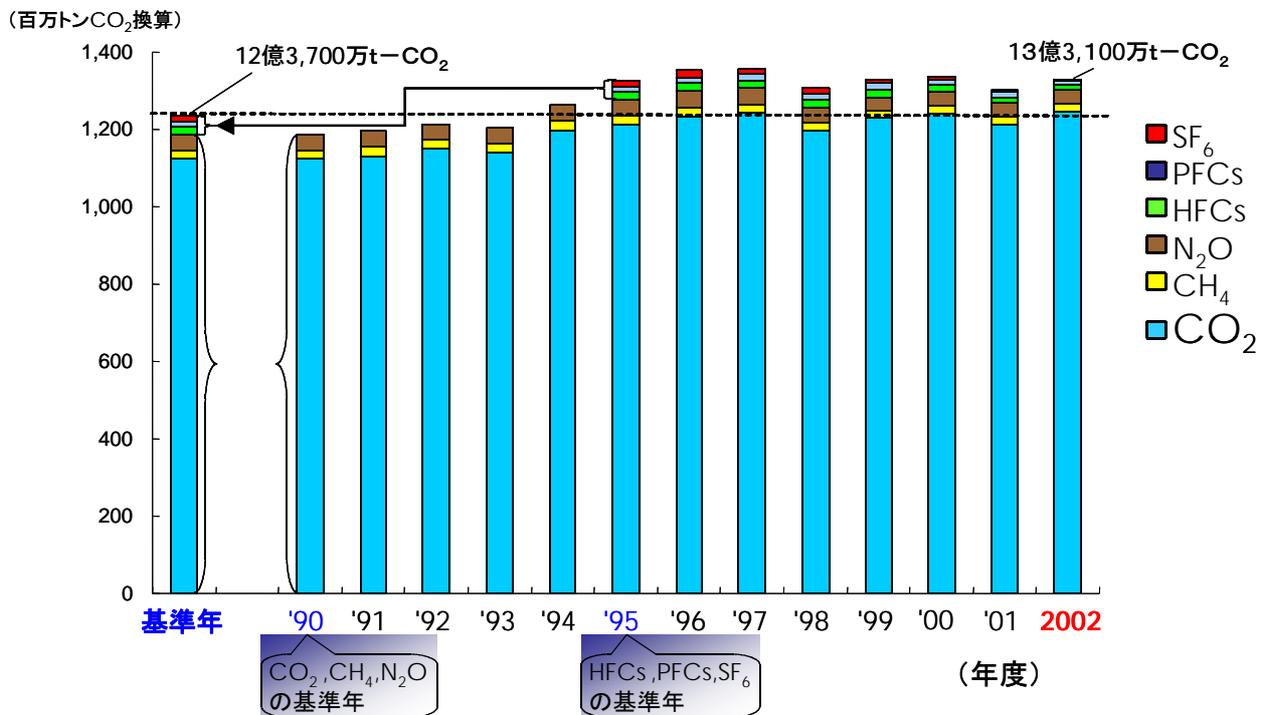
## II 大綱の評価

### 1. 現在の温室効果ガスの排出量の状況

#### (1) 1990年から2002年までの排出量の推移

- 2002年度の我が国の温室効果ガスの総排出量は13億3100万トンとなっており、基準年の総排出量を7.6%上回っている。(図1参照)

(図1：我が国の温室効果ガス総排出量の推移)



- 基準年から2002年までの温室効果ガス排出量の増減を温室効果ガス別に見ると、我が国の総排出量の9割以上を占める二酸化炭素の増加が大きく、その他5種類のガスは基準年を下回っている。
- また、大綱で定められている、各温室効果ガス等の区分毎の目標との対比で2002年度の排出量を見ると、「エネルギー起源二酸化炭素」については排出量が目標の水準を大幅に上回っており、「非エネルギー起源二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素」及び「代替フロン等3ガス」については排出量が目標の水準を排出量が下回っている。なお、大綱の「革新的技術開発」及び「国民の各界各層の地球温暖化防止活動の推進」の区分に

については、エネルギー起源二酸化炭素の区分とは別に目標が設定されているが、統計として示される排出量データとの関係では、その効果は主としてエネルギー起源二酸化炭素の排出量の内数として算定されている。

## (2) 分野別エネルギー消費の国際比較

- 我が国の温室効果ガスの排出量のうち、エネルギー起源二酸化炭素が9割以上を占めている。これはインベントリ上、産業（製造業）、運輸、業務その他、家庭に分けられており、大綱でも、それに対応して、基準量、目標量、特定年度における排出量を算定している。エネルギー起源二酸化炭素の排出量ではないが、エネルギー消費量とGDPについて、主要国との分野別比較をしてみると、家庭部門のエネルギー効率が各国の中でも高いのが日本の特徴である。（図2、図3、図4、図5参照）
  
- 我が国は、全体として高いエネルギー効率を達成していることは事実であるが、具体的にどの分野のどの技術が、あるいはどのようなライフスタイルが高いエネルギー効率をもたらしているか、詳細な検討が必要である。